

98 「能格」

この言葉を見て、何のことか分かる人はそう多くはないと思う。言語学を学んだ人を除いて。言葉に関することに興味があり、これまでに 39 「言葉と思考」、49 「言葉と文字」、77 「漢字と日本人」、84 「漢字と中国人」、93 「日本語はどこから？」と言葉と文化について書いてきた。

かなり前のことになるが、パリ行きの国際列車に乗るため、スペイン旅行最後の街パンプローナから海沿いのサン・セバスチアンを經由して、バスでフランス国境の街イルンに入った。

このあたりはバスク地方といい、スペインにありながら独自の文化を持ち、言葉はバスク語を話す。

街中の標識はスペイン語（カスティーリャ語）とバスク語で表示されていた。バスク語は由来が不明の孤立した言語で、非常に難しい言葉といわれている。バスク語には「能格」というのがあり、何だか難しそうな言葉だ、というくらいにしか思っていなかった。この時点での知識はその程度で、そんなマイナーな言葉にそれほど興味を持っているわけではなかったのである。

最近、「能格」という言葉をネット上で偶然見つけたことがきっかけだった。

「能格言語」とは何だろう？ 少しずつ知識を得て行くうちに、興味が深まっていった。

「能格」との思わぬ“再会” (2011/11/17)

ある日の仕事で「地震列島 M9 誘発」という見出し案を見たとき、学生だった 1980 年代に知った「能格」という用語を思い出したのです。

問題の記事は東日本大震災に関連して、「マグニチュード 9 の本震が『誘発地震』と呼ばれる余震を誘発した」という内容です。それに付ける見出しとして編集者から当初出てきた候補が「地震列島 M9 誘発」。とっさに「これはおかしい」と感じたことがきっかけです。（なお、この見出しはすぐに「地震列島 M9 が誘発」とわかりやすくなりました）

◇見出しでの省略に「文法」

違和感のもと、もとの見出し案が「M9 が誘発する」ではなく「M9 を誘発する」としか読めないということ。一般化すると「他動詞に格助詞なしの体言がくっついたときは、主格 (M9 が=主語) ではなく対格 (M9 を=目的語) である」。これは、見出しの「文法」として新聞を作る側にとっては周知のことで、おそらく (はっきり意識されているかどうかは別として) 読者の皆さんにも知られていることであると思います。

さて、冒頭の「能格」です。学生として言語学をかじっていたとき、「能格」と聞いて「なんだかよくわからないぞ」というのが最初の印象で、あまり幸運な出会いではありませんでした。

文法上の「格」といえば、日本語にある「主格」(「主語」というほうがよりのなじみのある用語かもしれませんが)、「対格」(直接目的格、直接目的語) などには、まだなじみがあります。ザックリと言うと、「〇〇が」で表される格が主格、「××を」が対格です。ところが「能格」という語は、朝日新聞の記事データベースで検索しても一件もヒットしません。簡単な説明を言語学の入門書から引用してみます。

主格・対格構造の言語では動作の主体には主格が、自動詞と他動詞の区別なしに立ち、直接目的は対格に立つ。「王様が倒れた」と「王様が椅子を倒した」の両方の文で「王様」は「が」によって主格な

事が示され、直接目的語の「椅子」は「を」によって対格であることが示される。ところが能格構造の言語では、まず自動詞と他動詞は全く異なった活用をし、次に自動詞文では動作の主体は語尾のない絶対格、いわば「王様□倒れた」となるのに、他動詞文では「王様ば椅子□倒した」と、直接目的の方が語尾のない絶対格に立ち、動作の主体の方はここで仮に「ば」で示した別の格、能格に立つのである。

(千野栄一『言語学への開かれた扉』三省堂 1994 pp153-154)

「能格性」とか「能格動詞」とかいう言い回しを、能格構造の言語ではない日本語などにあてはめて（こじつけて？）何か論じてみたりする——というのが、当時のちょっとした流行になっていたとも記憶しています。自分が操ることのできる言語にない概念であるため、当時、理解しようと頭をひねっても、どうしても体感的にどういうものであるかわかることができませんでした。「コウモリであるとはどのようなことか」ではありませんが、「バスク語なりグルジア語なり、能格をもつ言語の話者になりでもしなければ、本当に理解することはできない」などと考えたものでした。

◇ “絶対格”があった？

その後二十数年、ことばに関連した業界から離れていたのですが、一昨年、縁あって現在の校閲記者の仕事をするようになり、思わぬかたちで「能格」と再会することになりました。それが冒頭の瞬間です。正確にいうと「能格」それ自体ではなくて、能格と表裏一体の関係をもつ「絶対格」のほうと、でしたが。この「絶対格」のほうも、最初に聞き覚えたときには、理屈では「そんなものか」と思うものの、「どのようなものか」を実感することは、まったくできずにいました。

見出しでは「M9 誘発」が「M9 を誘発する」である一方で、「自動詞文の主格も、格助詞なしの体言の形で登場する」、つまり「M9 発生」なら「M9 が発生」——ということも周知のことです。「他動詞文の対格と自動詞文の主格が、同一形式で現れる」。——二十数年前にどうしても体感することのできなかった「絶対格」の定義との“符合”を感じました。

「他動詞文の動作対象と自動詞文の動作主が、『格助詞なし』という同一の形をとる」という事例を、自分が体感することのできる「日本語の新聞の見出し」に見いだしたことで、「能格言語の話者が絶対格をどのように体感しているか」を疑似体験することができた？という思わぬ「再会」を果たしたのでした。(加藤宣夫)

言語のタイプは2種類あり、1つは「対格言語」もう1つは「能格言語」である。

対格言語とは、主語【主格】に対し他動詞の目的語が【対格】となって区別されるものをいう。

❖ 太郎が【主格】走る（自動詞文）

❖ 太郎が【主格】次郎【対格】を呼ぶ（他動詞文）

日本語や英語など、多くの言語は対格言語である。

自動詞とは目的語を必要としない動詞、他動詞は目的語を必要とする動詞、中には自動詞でありかつ他動詞として使われるものもある。

「格」とは、名詞が他の単語との関係を決める働きを持つものをいう。

対格言語に対し能格言語とは、他動詞の「目的語」と自動詞の「主語」がともに【絶対格】という格で表され、他動詞の「主語」を表す格を【能格】という格で表されるものをいう。絶対格とは「が」や「を」などの助詞を伴わないものをいう。

つまり、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じように扱われ、他動詞の主語だけを特別扱いするのが

能格言語の特徴である。自動詞文と他動詞文で主語の形が変わる言葉といえば分かりやすい。

❖ 太郎【絶対格】走る（自動詞文）

❖ 太郎○【能格】次郎【絶対格】呼ぶ（他動詞文）

日本語で書けばこのようになるが、日本語は能格言語ではないので、他動詞の主語が特別扱されていることが全く分からず通じにくい。しかし、バスク語は同じ単語でも、その単語が自動詞文の主語である場合と、他動詞文の主語である場合で単語の形（格）が異なってくる。

（以下ネット上の翻訳ソフトを使用。私は全くバスク語が解りません）

【例】Taro korrika 「太郎が走る」

Tarok Jiro deitzen du 「太郎が次郎を呼ぶ」

上の文は「走る」という自動詞、下の文は「呼ぶ」という他動詞を使った文である。

「太郎」に注目すると、自動詞文では "Taro" なのに、他動詞文では "Tarok" と変化し、他動詞文の主語には "-k" という文字が付けられる。これを「能格」といい他動詞文の主語にだけ現れる。

一見奇異に思われるが、日本語でも「雨降る」（自動詞文）や「雨恨む」（他動詞文）といった表現でも通じることを考えれば、能格型というのが決して特異なものというわけではない。

「雨降る」の「雨」は自動詞文の主語、「雨恨む」の「雨」は他動詞文の目的語であり、いずれも格助詞が省略され、絶対格のようにみなすことができる。

日本語の場合、格助詞（が、を、に、へ、など名詞についてその名詞と他の語との意味関係を示す）が整備されるまでは、むしろこうした表現の方が一般的だった。現在でも口語では格助詞を使わない表現が良く用いられ、「私寝る」「ご飯食べた」など違和感なく使われる。

また「私は弟をもっている」というより「私には弟がいる」と「弟」を絶対格的扱いにした能格的表現のほうがよりしっくりくる。

「法律は守らなければならない」というとき、「法律」は守るという行為を行う主体ではなく、行為の対象となる「目的語」であり、「は」で表す格は「主語」にも「目的語」にもなりうる。「は」が使われるとき、それは絶対格の格助詞的な働きとなり、能格言語のような表現となる。

また、対格的表現から能格的表現への変化は、受動態での「動作主」を表す“によって”が「能格」として解釈され、こうした他動詞文の「目的語（被動作主）」と自動詞文の「主語」は同じ“が”という「絶対格」に相当すると解釈され、能格的表現になっていく。

他動詞の「目的語」は文の「主題」であることが多い。「は」は主題を表す助詞であるから、日本語でも能格言語的な表現ができるのは、「は」が主題を示しているからである。

自動詞には2種類ある。「走る」「踊る」などのように、意図的に動作を行うものを主語とする自動詞を非能格動詞、「壊れる」「枯れる」などのように、主語となるものの変化を表す自動詞を非対格動詞という。非対格動詞は、他動詞的な特徴を備えた自動詞ともいえる。非能格動詞は主語だけ、非対格動詞は目的語だけをとる。

バスク語のもう一つの特徴は多人称性（動詞は主語によって変化するが、それだけでなく目的語の人称によっても変化する）で、これは目的語が文の主役であるような（能格言語の）性質と密接に結びついている特徴と考えられる。

バスク語は現存するどの言語とも、系統関係が明らかにされていない孤立した言語であり、西ヨーロッパで唯一生き残ったインド＝ヨーロッパ語族に属さない言葉である。

イベリア半島がローマ帝国に征服され、バスク人が住むイベリア半島北部もローマ帝国の支配下に入ったが、バスク人はローマの支配に対し抵抗を続け、最後まで制圧されることなく今日まで独自の言語、文化を保ってきた。

世界にはバスク語のような能格言語がいくつかあり、比較的マイナーな言葉ではあるが、グルジア語、ヒンディー語、チベット語、イヌイット語、オーストラリアの原住民の言語、北米インディアンの言語などが含まれる。

本論から外れるが、言語の難しさについて少し考えてみたいと思う。

バスク語は確かに難しい言葉といえるが、難しさにもいろいろある。日本語も難しいと言われることがあるが、言葉の難しさは、その人がどのような言語を話すのかによって異なってくるので、一概に比較するのは難しい。

ネット上には、いろいろな観点から言葉の難しさを紹介した記事や動画が投稿されている。玉石混交なので、見る側がしっかりとした判断基準を持っていることが必要である。

一例として、ネット上に公開されている言語の難しさのランキングを引用する。

「**WatchMojo Japan** 世界で一番難しい言語とは？ランキングTOP10」

英語による動画で、英語を母国語とする人からみた難しさのランキングである。

以下は、日本語の字幕を書き取って整理したものである。言葉の持つ多くの側面の比較評価について統一性がなく、難易度の判定に客観性が欠けている。一般的に、難易度の比較はこのようになることが多い。ランキング結果について個人的には多めに疑問が残るが、この動画は説明がコミカルで遊び心に溢れており、気楽に見て楽しむ動画を目指したものと思う。

10 ハンガリー語

14の母音と18の格が存在し、前置詞を入れると格は35まで増える。表現が豊かで、熟語に多くを頼っている。多くの言語と完全に異なる文章の構造、接尾辞が語順でなく時制を表す。

9 コイサン語 (アフリカ ブッシュマンの言葉)

話し言葉のみで書き言葉がない。最も子音の数が多く、そのため音の操り方に大きく依存している。文献がないので学ぶことが難しい。

8 韓国語

孤立語で他言語との共通性がなく、韓国と北朝鮮のみで話される。言語の希少性と完全に独自で発展したアルファベット(ハングル文字)であり、古典的な言語の構造と反対である。文章の構造も複雑で、行動を表す文は主語を最初に、次に目的語、そして最後に動詞または動きを表す言葉が来る。

7 アイスランド語

アイスランド語は、新しい言葉や物、コンセプトなどを説明するために、他の言語からの単語や借用語を使うことを否定しているという点で、現代に馴染んでいない言葉である。その代り、新たな概念には新しい言葉が与えられる。当初確立された独特の文章と文字構造を守っている。

6 サンスクリット語

もともとヒンズー教の神聖な言語である。仏教、シーク教、ジャイナ教の哲学的な言語である。驚くほど独特な文法に苦戦するだろう。サンスクリット語によって、口の全ての部分を使う優れた言語トレ

ーニングができる。その上、その構造は感受性豊かで、哲学的な概念に溢れている。男性詞、女性詞、中性詞の3つの性別名詞があり8つの格がある。非常に複雑な活用も要求される。

5 フィンランド語

フィンランド語の文法ルールは、英語を話す人々にとって率直に言って狂氣的。構造も発音も、翻訳することも非常に難しい。口語的で表現的な言語のため、それを母国語とする人々はルールを常に守って話すわけではない。

4 日本語

少しでも上手く話そうとする前に、膨大な準備と熱心な勉強が求められる。どうにか普通に書けるようになるためには、はじめに数千もの文字を学ばなければならない。それらの文字の多くが複雑な発音と意味を持っていて、それらを組み合わせるルールを考えると難易度はさらに増す。日本語のライティングは平仮名、カタカナ、漢字という複数の要素で構成されていて、その規則は文章を使用する場面によって変わる。これらすべてを理解したら、ついに日本語を話すという苦難に立ち向かうことができる。

3 アラビア語

文字どうしの組み合わせが難しい。それらはアラビア語の名前または言葉で学ぶことは困難。単語の大半が配置によって異なる4つの形態に分かれている。短母音はアラビア語の文字には存在しない。単語は基本の語源に由来し、文法と構造にも乗せられる。方言も多く存在し多様な変化をしているため、お互いにとって全く異なる外国語に思えることもよくある。英語にない発音も複数ある。

2 ロシア語

コミカルなアクセントからロシア語を真似するのは簡単なように思える。文語で使われているのはキリル文字で、英語で使うアルファベットとは極めて異なる。アラビア語と同様にロシア語は、英語とはかなり異なる発音で構成されていて、習得するには何年もの練習が必要。ロシアと西欧の関係の悪さも学ぶ上では障害である。

1 中国語

北京語と広東語を中国語として含める。発音が重要な言語で、北京語は4つのトーンと1つの中音、広東語は6つまたはそれ以上のトーンを使う。同音異義語や慣用句、ことわざなどで溢れかえっているため、たとえ言語を知っていても理解できないこともある。漢字の用法はほぼ無限大、つまり継続的な学習が必要。正直、中国語には明確な終わりは見えない。続けるかギブアップするかしかない。

この順位を見れば、英語を母国語とする人からは、やはり系統の異なる言語が難しいということが明確に表れている。ウラル語族に属するハンガリー語やフィンランド語、アフリカやアラブ圏の言葉、そして漢字やハングル文字、キリル文字などアルファベットと異なる文字を使う言葉が難しい。ただ、アイスランド語は系統が同じはずだが？さらに現在使われていないサンスクリット語が入っているのはなぜだろう。

多くの西欧人から見て、日本語の難しさは次のように整理されるだろう。

- (i)文字：平仮名、カタカナ、漢字と3種類の文字があり、特に漢字が難しい。漢字の難しさは、文字が複雑で覚えにくいことや、同じ文字で読み方がいくつもあること。
- (ii)文法：「が」「を」「に」「の」「と」といった助詞の使い方が難しい。

(iii)敬語：相手，場面によって表現が異なることが難しい。

言語学の専門的な立場から見た「言語の難しさ」はどうなるだろうか？

「言語学的に言えば」という本に「言語の難易度って測れるの？」(ラーズグナー・アンダーソン)という一説があったので、少し長くなるが引用する。(部分的に省略あり)

言語学者は、世界中の言語の中でどれが簡単だとかむずかしいといった議論はしない。なぜなら、言語の難易度を測る単一の物差しは存在しないし、言語にはいろいろな種類のむずかしさがあるからだ。

外国語としてある言語を学ぶむずかしさは、相対的なものである。学ぼうとしている言語が自分の母語から見てどれほど近い、あるいは遠い言語なのか、ということだ。しかし、この章の表題が問うているのは、外国語として見た場合のむずかしさではなく、その言語のシステムそのものが他の言語と比べて絶対的な意味でむずかしいとか簡単だとかいえるのかという問題である。

ある言語を「知っている」という場合、それはいったい何を知っているということなのだろう。仮に「文法」「語彙」「用法」という3つのカテゴリーに分けて考えていくことにしよう。英語を第一言語とする人の脳には英語の文法が入っている。この文法のおかげで、どの英語のネイティブスピーカーもほぼ同じ発音や語順で話すことができる。また、英語の文法が脳に入っていると、英語の語彙を自在にあやつることができる。時には、ことばにつまることもあるが、たいていは苦勞することなく、正しい語彙を見つけることができる(外国語で話しているとき、正しい単語を見つけるむずかしさと比較してみてもよい)。また英語の文法が脳に入っていると、英語の用法に関するルールも知っていることになる。

このルールを知っているからこそ、話をすべきときと話すべきでないときを区別できたり、人に話しかけるときの言い方、質問のしかた、電話での会話のしかたなどがわかるのである。

さて、母語であろうと外国語であろうと、言葉を学ぶときにいちばんむずかしいのは語彙の習得だろう。言語の知識を構成する3つのカテゴリーのうち、いちばん時間がかかるのが語彙の習得だ。個々の単語はそれほどむずかしくなくても、何千という単語を覚えるとなると、かなりの時間がかかることは間違いない。母語であっても、文法は就学前に習得してしまうが、語彙の習得は一生続いていく。語彙の習得がもっともむずかしく、もっとも時間がかかるというのはそういうことだ。したがって、語彙の絶対数が少ない言語のほうが語彙の数が多言語よりも習得は簡単なはずだ。だが、単純にそうとも言い切れないのである。さまざまな概念を表現するには語彙が必要であり、概念によっては語彙が少ないと表現がむずかしいという場合もあるからだ。

自分の母語であっても、1つの言語に含まれるすべての語彙を習得できる人はいない。また、1つの言語に含まれる語彙の数を正確に知っている人もいないだろう。第一、単語とは何かを正確に定義することもむずかしいのだ。

言語の知識を構成するカテゴリーの2つ目が「用法」である。用法とは、言語を運用する際に必要なさまざまなルールのことである。たとえば、どんな状況でどのような話し方をすべきか、どんな状況で誰が発言すべきか、といったことに関する決まりのことだ。各地の文化的近似性が高まってきているため、言語の用法も基本的に似通ったものになってきている。丁寧語や間接的な表現など、用法に関するルールが簡単な言語のほうが習得は容易なのは当然だろう。イギリス人の大学講師が教室に赤ん坊を連れてきたスウェーデン人の学生に向かって、

Are you sure the baby will be all right in here? (赤ちゃんはここで大丈夫ですか?) と聞いたとする。ス

ウェーデン人の学生は、Sure no problem. (ええ、大丈夫です) としか答えない。しかし、おそらくこの講師は質問の形をとりながら、彼女に「赤ちゃんを連れて教室を出て行ってほしい」と要求しているのだ。文化的背景の異なる人々がコミュニケーションを取るとき、このような誤解が生じるのはめずらしいことではない。その原因となっているのが、言語の用法の違いである。間接的な表現に関するルールが少なく、丁寧さを表現するための方法がシンプルな言語は「簡単な言語」といえる。ヨーロッパのほとんどの言語の代名詞には「親称」と「敬称」がある(ドイツ語の du と Sie、フランス語の tu と vous、ロシア語の ты と вы など)。現代英語と現代スウェーデン語にはこの区別はない。したがって、呼びかけのことばに関しては、英語はドイツ語やフランス語よりもシンプルだということになる。しかしながら、英語ではもっと微妙な、したがって習得するのがむずかしい方法で、社会的距離をあらわしているということもできる。たとえば、相手を名前で呼ぶ場合、ファーストネームで John と呼ぶか、愛称で Johnnie と呼ぶか、姓のほうで Smith と呼ぶか、敬称をつけて Mr. Smith と呼ぶかといった選択肢がある。

このように用法に関しても、この言語は簡単だとかむずかしいとか単純に言い切ることはできない。自然言語というものは、個人から個人へ情報を伝達するだけでなく、人々のあいだの社会的差異を示し、維持する機能も併せ持つ。社会的差異はあらゆる社会に存在するわけで、それに応じて用法に関するルールも数多く存在することになる。一方、異なる言語を母語とする人々のあいだのコミュニケーションを簡便化するために人工的につくられたエスペラント語のような言語は、他の言語よりも用法が簡単だといってもいいだろう。

書きことばや正書法(つづり方)も習得するのがむずかしいものの1つだ。ヨーロッパ人がアラビア語や中国語、日本語の読み書きができるようになるまでには、たいへんな時間を要する。しかし、こういった種類のむずかしきはここでは問題としない。それは、書きことばやつづりは言語の中で表面的な要素と考えられるからだ。

原理的には、言語の構造をまったく変えずにつづりを変えることも可能である。たとえばトルコ語は以前、アラビア文字を使って書かれていたが、1928年以降、ラテン語のアルファベットが使われている。ラテン語のアルファベットに慣れている人にとっては、このほうがずっと簡単であろう。つづりに関して言えば、音と文字が1対1で対応するシステムになっている言語のほうが、そうでない言語よりも簡単だといえる。何千年も前から文字を持っていたヨーロッパの言語は、最近になって文字を持つようになった言語に比べて複雑な正書法を持っている。正書法を新しく考案するとしたら、現在、ヨーロッパの言語によく見られる黙字などをわざわざ入れたりしないはずだ。

言語の難易度を測る絶対的な物差しがあるとするならば、文法の領域にあるはずだ。まず音声に関する文法から考えてみよう。母音や子音の数が少なければ少ないほど、そして音節の構造が単純であればあるほど、音声学的には簡単な言語だといえる。ハワイ語には、13の異なる音(これを言語学用語では「音素」という)があり、そのうち8つが子音5つが母音である。音節の構造に関しても厳密なルールがあり(ほとんどの音節は、子音1つと母音1つの組み合わせで、母音のあとに子音が来ることはない)、この組み合わせは全部で162個しかない。ちなみに、英語の子音は screams や splints のように母音の前にもあとにもくっついてくる。世界中の言語の中で、ハワイ語は非常にシンプルな音声システムを持つ言語の1つだ。

その対極にあるのが、コイサン語である(以前はブッシュマン語、ホットtentott語と呼ばれていた)。最近、発表された論考によれば、南ボツワナで話されているコーという言語には、音素が156個もあ

るそうだ。そのうちの78個は英語を母語とする者の耳にはなじみのない「クリック」と呼ばれる音で、50個が子音、28個が母音である。別の研究でも、この地方の他の言語に約150個の音素があることが確認されている。このような言語は非常に複雑な音声システムを持っているといえる。

このように音声システムに関しては、1つの物差しで世界の言語を比較し、難易度を測定することは可能なかもしれない。英語はこの物差しの真ん中あたりに位置している。おそらく世界中のほとんどの言語がこのあたりに集中していると思われる。音声システムだけに関して言えば、ほとんどの言語はだいたい同じくらいの難易度であり、それよりもかなり簡単な言語やむずかしい言語がいくつか存在するということである。

言語の分析方法として、活用形や派生形の作り方、つまり単語を組み立てるのにどのように部品を組み合わせるか、という観点から分類するやり方がある。この部品のことを「形態素」という。たとえば、英語の *teachers* という語は、*teach-er-s* という3つの形態素に分けることができる。*-er* は派生形の形態素、*-s* は活用形の形態素である。活用形や派生形のない、あるいは少ない言語を「分析的言語」といい、活用形や派生形の多い言語を「総合的言語」という。活用形や派生形の多少によって世界の言語を1つの物差し上に並べてみると、その両極は、ベトナム語（分析的言語）とグリーンランド語（総合的言語）だろう。分析的な言語は総合的な言語よりも絶対的に簡単だといえる。その証拠に、どの言語においても子どもはより分析的な表現から習得し、活用形や派生形はあとから学んでいく。

また、世界各地で話されているピジン語もほとんどが分析的言語だ。ピジン語とは、異なる言語と言語が接触したことによって自然に生まれた言語のことを指す。

さて、言語の難易度を測る基準について考えていくと、もう1つの問題にぶつかる。それは、言語を構成するすべての面がどれもむずかしい、あるいはどれも簡単だという言語はない、ということである。たとえば、フィンランド語は冠詞 (*a* や *the*) がいないという意味では英語よりも簡単だといえる。しかし、フィンランド語の名詞の活用は非常に複雑であり、その点を考えれば英語よりもむずかしいといえるだろう。それぞれの言語には単純な部分と複雑な部分と両方あって、全体としてバランスがとれているのかもしれない。

単純な部分と複雑な部分があると簡単に書いたが、実際、言語の難易度を測るという問題はそれほど単純なものではない。どこまでが簡単でどこからがむずかしいと判定するのか、明確な基準があるわけではないからだ。たとえば、マオリ語などは名詞を修飾する形容詞は1つしか使えないことになっている。英語の *I saw a fat black cat.* という文を翻訳する場合、*I saw a fat cat. It was black.* という言い方をしなくてはならない。マオリ語と英語を比べた場合、どちらが簡単なのだろうか？英語のほうが単語の数が少ないから簡単だろうか？それとも文の構造がシンプルなマオリ語のほうが簡単なのだろうか？

こうした質問に対してきちんと答えることはむずかしい。また、言語の文法そのものが簡単かむずかしいかを明確に測定することもむずかしい。

以上見てきたように、簡単な言語とむずかしい言語があると信じている人は多いが、ただの思い込みとはいいい切れなようだ。ある言語は、確かにある面においてはその他の言語よりもむずかしい。しかし、そのむずかしさの中身は複雑であり、言語が簡単かむずかしいかを測る1つの物差しは存在しない。

少なくともいくつかの物差しが考えられるし、何よりむずかしいのは、複数の物差しで測った結果をどう組み合わせるのかだ。つまり、ある面で簡単だとされた言語が、ほかの面ではむずかしいという場合、その言語は簡単と判定されるのだろうか、それともむずかしいと判定されるのだろうか。

世界の言語の中には、簡単な言語とむずかしい言語が存在するように見えるが、どのような点がどの程度簡単なかむずかしいかを説明するのは実にむずかしい。本章の結論としては、こういうことになるだろうか。

以前にも取り上げた、高島俊男氏の著書「漢字と日本人」に次のようにある。

『日本の言語学者はよく、日本語は何ら特殊な言語ではない、ごくありふれた言語である。日本語に似た言語は地球上にいくらかもある、という。しかしそれは、名詞の単数複数の別を示さないとか、賓語（目的語）のあとに動詞が位置するとかいった、語法上のことがらである。かれらは西洋で生まれた言語学の方法で日本語を分析するから、当然文字に着目しない。言語学が着目するのは、音韻と語法と意味である。しかし、音声が無力であるために言葉が文字の裏付けをまたなければ意味を持ちえない、という点に着目すれば、日本語は、世界でおそらくただ一つの、きわめて特殊な言語である。』

前に述べたように、西欧人から見た日本語の難しさとして、「漢字には同じ文字で読み方がいくつもある」ということがある。逆に、一つの読み方にいくつもの漢字が該当し、読み方だけでは漢字が確定しないということもある。ラーズグナー・アンダーソン氏は、言語学の専門的な立場から見た「言語の難しさ」の中で、アラビア文字や漢字などの書きことばや正書法（つづり方）は、言語の中で表面的な要素と考えられるため難しさの対象とはしないと述べている。このように、評価対象となる言葉の要素についてもさまざまな考え方があることから、言葉の難しさの判定は極めて難しいと言わざるを得ない。

言語研究の発展段階において次のようなことがあった。帝政ロシア時代に併合されたコーカサス地方諸民族の言語は、非常に変わった文法構造を持っていた。ロシアにおいて多くの学者たちの研究が積み重ねられ、それらは能格言語であると考えられていたが、能格言語の研究が進むにつれて、これまで能格言語と考えられていた言語の中には、これとは違うものがあることが分かってきた。

それは活格言語といわれ、アメリカ先住民、パプア・ニューギニアやオーストラリアのアボリジニの言語がそれにあたり、世界に思いの外広く分布していることが明らかになってきた。

さらに研究が進み、能格言語は活格言語から発展したものであること、対格言語は能格言語から発達する場合と、インド・ヨーロッパ語族の場合のように、直接活格言語から発展する場合があることなどが分かってきた。これらの類型を区別する根拠となるのは、主語、述語、目的語のありかたが全く異なるということである。これによって、従来ははっきりしなかった能格言語の特徴が明らかになると同時に、主格と対格を基本的な格とする対格言語の特徴も明確になってきた。

活格は能格の一形態であるという考え方から、「対格言語」に対して、能格言語と活格言語を合わせて「非対格言語」と呼ぶことがある。活格言語は、対格言語と能格言語の性質を併せ持った言語であり、この意味で活格言語は対格言語と能格言語の中間的な存在であるといえる。

言語の類型は「対格」「能格」「活格」3つのどれかに属し、それらは言語全体の文法的特徴を形成する骨格のようなものということができる。

対格言語（英語・日本語など世界の多くの言語）では、自動詞の主語と他動詞の主語が同じ格（主格）で標示される。一方、能格言語（バスク語など）では、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格（絶対格）で標示される。活格言語では、自動詞の主語が、場合によって他動詞の主語（動作主）と同じよう

に標示されたり（対格言語的）、他動詞の目的語（被動者）と同じように標示されたり（能格言語的）する。

活格言語は、外的な世界を生物であるか、それ以外のものであるかに分類する。文法的な性は、生物と無生物に分かれる。無生物は行為主体にはなれないから、標示のない格（絶対格）しか与えられないのに対して、生物は行為の積極的な主体となるものには標示のある格（活格）が、また行為の相手や状態の担い手には標示のない格（絶対格）が与えられる。述語となる動詞も同様に、生物に関わる行為動詞や状態動詞（活格動詞と呼ぶ）と、無生物に関わるもの、あるいは生物でも絶対格としての名詞と結合する状態動詞（絶対動詞と呼ぶ）の2つに分かれる。

活格言語のもう1つの特徴として、活格動詞には意味的には自動詞も他動詞もあるが、これらは文法的なカテゴリーにはならず、他動詞と自動詞の区別がないことがあげられる。

例えば「行く」と「運ぶ」、「走る」と「追う」、「燃える」と「焼く」、「死ぬ」と「殺す」等の語彙的な区別は原則としてない。例えば「滑る」という動詞が、被動者になれば「足を滑らす」ことを、動作主になれば「滑る」ことを意味する。

行為の主体としての活格が存在するときには他動詞的、存在しなければ自動詞的となる。このような特徴から、活格言語は対格言語に較べて、現実の把握の仕方がより直接的な言語といえる。

活格の標示を〔活〕、不活格の標示を〔不活〕とすると、活格言語の文は、

- ・太郎〔活〕 コップ〔不活〕 割った。 〈他動詞〉
- ・コップ〔不活〕 割れた／溶けた／温まった。 〈自動詞〉
- ・太郎〔活〕 走った／働いた／学校に行った。 〈自動詞〉

というようになる。

つまり、意志的な動作の主体を主語にとる自動詞は、他動詞の動作主と同じ活格で標示され、無意志的な変化の対象を主語にとる自動詞は、他動詞の対象と同じ不活格で標示される。

この活格言語は、世界を生物と無生物に区別する「ものの観方」に基づいている言語であり、文の意味・関係に「格」が合致していても合理的な言語といえる。

他動詞の主語になるものを「行為者」Actor、自動詞の主語になるものを「主体」Subject、行為を受けるものを「被行為者」Patient とする。Actor と Subject は「行為を行う」という共通性を持ち、一方 Subject と Patient は「行為を他におよぼさない」という点で共通している。

英語などインド・ヨーロッパ諸語は「行為を行う」という共通性に基づいて、自動詞の主語（A）にも他動詞の主語（S）にも同じ主格を用いる。これに対して Patient は目的格という異なった格を用い、主格と対立させている。一方、活格言語では「行為を他におよぼさない」という共通性に基づいて Subject と Patient を格の標示を持たない「絶対格」で表し、行為を他におよぼす Actor を「活格」として対立させる。Taro slapped Jiro, and ran away. (太郎が次郎をたたいて逃げた) という時、対格言語の我々は「逃げた」のは太郎に決まっているというだろう。しかしこれが正しいのは、対格言語の場合だけなのである。

太郎は次郎をたたいたのだから、右の表で太郎は A（行為者）で、次郎は P（被行為者）である。逃げたのは自動詞の主語である太郎 S（主体）となる。すなわち太郎（A）が次郎（P）をたたいて、（S）が逃げたということになる。

対格言語の場合は A と S は同じものと考えられ、主格で表

対格言語	格	活格言語
主 格	A（行為者）	活 格
	S（主 体）	絶対格
対 格	P（被行為者）	

されるので、逃げたのは太郎でなければならない。

これが活格言語による文だったとすると、SはPと共に絶対格で表されるので、逃げたのは次郎でなければならないことになる。体格言語を話す人々には一見奇妙に思われるが、言語の構造から完全に論理にかなっている。このことから、ある言語によって表されたことを、直ちに普遍化することが必ずしも正しくはないということが分かる。

言語によって「客観的現実」の構築の仕方は決して同じではないことが明らかになってきたのである。

対格言語は「誰が何をしたか」ということを重視する言語で、行為の主体性をはっきりさせるという特徴を持つ。それに伴って、行為の対象があるかないかを問題にするようになり、自動詞と他動詞の区別が重要になってきた。主格は常に行為と一体のものとして理解され、自動詞にも他動詞にも「行為主体」という意味で同じ主格が使われるようになった。対格言語は、行為者(A)だけでなく、単なるテーマ(S)を表すときでも主格を使うことができるので、受動態という表現が可能になった。

世界の見方、認識の仕方は決して一つしかないわけではない。それぞれの言語が、同じ客観的現実を違ったように認識し、違った論理で自分たちの世界像を作っているのである。

言語は、その言葉を話す人々の世界のとらえ方と不可分の関係にある。話す言葉と人々のものの見方、考え方とは深く関わっており、言語は思想そのものであるということが非常に興味深い。

(2020. 10. 15)